

Title	アンリイ・セエ「科学と歴史哲学」：Henri Se, Science et philosophie de l'histoire. 1933
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.7 (1935. 7) ,p.1033(143)- 1052(162)
JaLC DOI	10.14991/001.19350701-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350701-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三インタナショナルの重要性も失はれてきたのである。又斯かる事情は別としても第三インタナショナルはそれ自ら無力なものとなつてゐる。元來第三インタナショナルの國外の最大支柱は獨逸及伊太利の共產黨であるが、これらは全く壊滅し西歐革命は絶望状態にあり、又植民地に於ける運動も華々しくない。その世界大會は二八年の第六回以後今日迄開かれてゐない。各世界大會のプロトコールは刊行せられてゐるが、これは第三インタナショナルの研究に缺くべからざる資料である。又同じく出版せられてゐるテーゼ、並びに決議も同様である。プロトコールは次の如く出版せられてゐる。

I. Kongress	1921
II. "	1921
III. "	1921
IV. "	1923
V. "	2 Bde. 1924
VI. "	3 Bde. 1928-1929
テーゼ並決議	
I. Kongress	1920
II. "	1920
III. "	1921
IV. "	1922
V. "	1924
VI. "	1931

我邦に於てはプロトコール全集(既刊三卷)として翻譯出版したものがあつた。第三インタナショナルの關係文獻は多數でレーニン、ジノギエフ、ラヂック等を初めボルシエギの指導者達のこれに關する著述は可成多い。中でもこれが成立、發展を詳述したものには次ぎの著書がある。

Kabackschief, Chr.: Die Entstehung und Entwicklung der Komintern. (Probleme der Weltpolitik und der Arbeiterbewegung, Bd. 10.)

更に第三インタナショナルに就て今述べた如き情勢を詳細に取扱つてゐるものに

Florinsky, M. T.: World Revolution and the U. S. S. R. 1933. Rosenberg, A.: Geschichte des Bolschewismus. Von Marx bis zur Gegenwart, 1932.

英譯 A. History of Bolshevism. From Marx to the First Five Year Plan. Tr. by I. F. Morrow, 1934.

の二書がある。又最近出版せられたホルマンの次ぎの著書は第三インタナショナル排撃のもので、その世界大會のプロトコール其他の正確な資料を豊富に利用して第三インタナショナルの總ゆる方面に觸れてゐる。

Nonnann, A.: Bolschewistische Weltmachtpolitik. Die Pläne der 3. Internationale zur Revolutionierung der Welt. 1935.

アンリイ・セエ「科學と歴史哲學」

—Henri Sée, Science et philosophie de l'histoire. 1933.—

下 田 博

本書の著者アンリイ・セエに就いては今更贅言するを要しない。彼の著「唯物史觀と歴史の經濟的説明」(Matérialisme historique et interprétation économique de l'histoire, 1927.)の亞米利加版への序文の中に於て、譯者ナイト氏も云へるが如く、彼が「現在の佛蘭西歴史家の中最も著名なるものの一人」(The economic interpretation of history by Henri Sée, Translation and introduction by Melvin M. Knight, 1929, p. 37.)であり、且又、非常なる多作家であることは周知のことゝ屬するであらう。

一八六四年九月六日巴里の近郊に生れ、十九歳の時に巴里大學に入學して七年間當雪の功を積み、優秀なる成績を以て「卒業試験」(Agrégation)に合格し選拔大學教授候補團の一人に指令されて學者的生涯に入り、而して一八九二年「路易十一世と都市」(Louis XI et les villes)なる論文に依つて「文學博士」(Docteur-Lettres)を授與せられ、一八九三年以來レヌヌ大學の職員となり次いで一八九七年同大學教授に任ぜられ、一九一四年現職を引退して今日に至る迄の間、彼の著書は實に次の如き多數に上つて居る。

Louis XI et les villes, Paris, 1892.

アンリイ・セエ「科學と歴史哲學」

- Les classes rurales et le régime domanial en France au moyen âge, Paris, Giard et Brière, 1901.
- Les classes rurales en Bretagne du XVI^e siècle à la Revolution, Paris, Giard et Brière, 1906.
- Esquisse d'une histoire du régime agraire en Europe au XVIII^e et XIX^e siècles, Paris, M. Giard, 1921.
- Les idées politiques en France au XVIII^e siècle, Paris, Hachette, 1920.
- Les idées politiques en France au XVII^e siècle, Paris, M. Giard, 1923.
- La vie économique et les classes sociales en France au XVIII^e siècle, Paris, Felix Alcan, 1924.
- L'évolution de la pensée politique en France au XVIII^e siècle, Paris, M. Giard, 1925.
- L'évolution commerciale et industrielle de la France sous l'ancien régime, Paris, M. Giard, 1925.
- La France économique et sociale au XVIII^e siècle, Paris, coll. Armand Colin, 1925.
- Les origines du capitalisme moderne, Paris, coll. Armand Colin, 1926; 2^e éd., 1930.
- La vie économique de la France sous la monarchie censitaire (1815-1848), Paris, Felix Alcan, 1927.
- Etudes sur l'histoire du commerce et de l'industrie (Mémoires et documents sur l'histoire du commerce et de l'industrie, publiés par Julien Hayem, 9^e, 10^e et 12^e séries.)
- Materialisme historique et interpretation économique de l'histoire, Paris, M. Giard, 1927.
- Science et philosophie de l'histoire, Paris, Felix Alcan, 1928.
- Evolution et révolution, Paris, Flammarion, 1929.
- Esquisse d'une histoire économique et sociale de la France depuis les origines jusqu'à la guerre mondiale,

Paris, Felix Alcan, 1929.

Französische Wirtschaftsgeschichte, t. I (Handbuch der Wirtschaftsgeschichte, herausg. von G. Broditz), Jena, 1930.

Etudes sur la vie économique de la Bretagne, de 1772 à 1811 (Mémoires et documents publiés par la Commission des Documents économiques de la Revolution), Paris, Impr. Nationale, 1930.

Les voyages en France, d'Arthur Young, nouvelle édition critique, Paris, Armand Colin, 1931, 3 vol.

Science et philosophie d'après de la doctrine de M. Emile Meyerson, Paris, Felix Alcan, 1932.

Science et philosophie de l'histoire, Paris, Felix Alcan, 1933.

右の著作目録に依つて明らかなるが如く、今茲に紹介しやうとする「科学と歴史哲学」(Science et philosophie de l'histoire, 1933.)は曩に一九二八年に其の初版が出版せられて居る。本書は其の第二版訂正版であり、セエの歴史學方法論に關する著書としては最新のものである。「唯物史觀と歴史の經濟的説明」から「エミール・メイエルン説に依る科学と哲学」へ、次いで本書へと發展せるセエの史學理論は然らば一體如何なるものであるか。著者は本書を分つて二篇とし、第一篇に於いて「史論」を、第二篇に於いて「評論」をば試みて居るが、其中、第一篇の前半(第一章より第四章まで)は歴史哲學の起源と發展とを論述せるものであり、而して第二篇に收むるところの全十二齣は、殆ど悉くが頗る特殊の問題を取扱へるものであつて、結局、科学及び歴史哲學に關する著者自身の見解が積極的に表明せられて居るのは、第一篇の後半、即ち第五章より第八章までに於いてである。吾々は、併し、著者と共に、先づ、一應、歴史哲學の起源と發展とを概観する必要がある。

「歴史」が一箇の「科學」として考へられるに至つたのは極めて最近のことに屬する。第十八世紀以前に於ける「歴史」は、Bossuet, Discours sur l'histoire universelle. (本書の出版年號に就くは A. Olieris, Discours sur l'histoire universelle de Bossuet, avec la chronologie des bénédictins et celle de Bossuet, 1869, Preface. 參照) 等を除けば、之を要するに、單なる年代記か、道德的訓戒若くは神學的敎文かに過ぎなかつた。「歴史」の「科學」性を確認し得るのは第十八世紀以後であり、而して「科學」的「歴史」確立のための最も顯著なる努力は、先づ、モンテスキューに依つて試みられたのである。彼が有名なる「法の精神」(De l'esprit des lois, etc., 1748.)を書いた時、彼の意圖は本書をして一の科學的力作たらしむるに在つた。彼は「歴史」の役割を以て、事實を聚集し、之を分類し、其の相互關係を明確ならしむるに在りと考へた。單なる事實の敘述は彼の満足し得る所ではない。斯くて、彼は「法の精神」の計畫を樹て、より十年の後即ち一七三四年に、「法の精神」の一部分と看らるべきものであらうが、然も獨立の著述たる資格に缺くる所なき「羅馬興亡論」(Consideration sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence, 1734.)を梓し、其の中で、羅馬人の異常なる成功及び其の没落の原因を探求し、人類社會に於ける萬事は因果律に依つて決定せられる、而して眞に作用するのは特殊の原因ではなく「其の道德的たると、自然的たるとを問はず、普遍的原因」であつて、「一切の事變は是等の原因に従ふものである、」(Ibid., 1886, chap. XVII, p. 133.)即ち如何なる歴史的事實と雖も決して偶然の所産に非ざる所以を論證せんと努めたのである。然も、更に、彼が其の大著「法の精神」に於いて、神學的乃至形而上學的觀念から脱して法の精神を説明し、法が決して絶對的性質を有し得べきものではなく、氣候、習慣、信仰及び政治制度と密接の關係を

有することを證明せんと試みて居ること、即ち一定の先入觀念から出發せずして、直接に歴史的事實そのものゝ取扱ひから始めんとして居ること、此の點に於いて、彼の態度は正に近世歴史學の方法に従へるものと云ひ得るのである。

モンテスキューに比すれば、ヴォルテールは科學者的風格に於いて劣るが、啓蒙哲學の唱道者、舊制度(アンシヤン・レヂウム)の批評家として大衆に呼び掛くる力強さに至つては到底モンテスキューの比ではない。若も「余は國家なり」と云つた路易十四世を舊制度の代表者とすれば、ヴォルテールは正に之が破壊運動の有力なる代表者と云ひ得やう(Robert Flint, La Philosophie de l'Histoire en France, 1878, p. p. 81-82. 參照)。然も、モンテスキューが、既述の如く、歴史現象に於ける因果法則を力説し、又法と云ふ特殊の歴史現象の相對性を強調するに忙くして、一般史的乃至發展史的研究に於いて足らざる憾がある所をば、よくヴォルテールが充して居る點は充分注目に値する。即ち其の名著「國民風習及び精神論」(Essai sur les Mœurs et l'Esprit des Nations, 1756.)は、頗る實證的方法を以て書かれ、事件の説明を人々の輿論及び感情に求め、之を神の意志に求めざる點に於いて、モンテスキューと軌を一にするのであるが、其の目的がシャレマンから路易十三世迄の間に於ける國民風習の發達、社會の進歩、人心の發展を辿るに在る、即ち、要するに、人心並に社會の歴史を書かんとするに在る點、モンテスキューと頗る異なるものと云はねばならぬ。實に、文明發達の經路、文化の起源と表現、人類が野蠻蒙昧から文明開化に至れる方法を述べるために一般史を著述する事こそヴォルテールの意圖する所であつた。而して此の事は彼の「歴史哲學」(La Philosophie de l'Histoire, 1765.)に於いても亦同様である。歴史哲學なる名稱を作つたのは、恐らく彼の「歴史哲學」を以て嚆矢とするであらうが、併し、勿論、彼の所謂歴史哲學は第十九世紀以後に發達せる

歴史哲學の意味ではない。其れは哲學的に歴史を觀察することであり、哲學的とは第十八世紀の啓蒙的、自由思想家的の意味である。一切の迷信と不合理、神話と傳説、奇蹟と感激とを斥けて、社會現象を批判的に觀察することである。然も、此の合理主義を以て、歴史を神學から嚴密に區別し、之を内在的、自然的に解釋し、以て人類の原始時代から一般史的乃至發展史的論究を試むることが此の「歴史哲學」の目的であつたのである。

此のヴォルテールの發展の思想、人心進歩の觀念は、總て、コンドルセエが其の「人間精神の進歩」(Esquisse d'un Tableau Historique des Progrès de l'Esprit Humain, 1793)の中に於いて一入強く解明せる所であり、而して彼が歐洲文明發達の跡を分つて九期とし、第一期に於いては、人類は狩獵及び漁撈に依存せる少人數の社會をなし、武器及び若干の家具を作製し、住居を建て若くは堀る粗雑な方法しか知らないが、併し既に彼等の必要を相通するために言語を有し、或る程度の公權と家族關係の存せる社會をなし (Condorcet, Op. cit., Tome 1, 1906, p. 20)。第二期は遊牧時代であつて、私有財産が行はれ、之と共に貧富の懸隔と奴隸とが起り、人口も増加し、智識を養ひ、簡單なる技術を發明し、初步の科學的原理を修得する餘裕を有せる時代であり (Ibid., p. 37)。第三期は農業時代であつて、富と閑暇とは愈々増大し、交通は發達して、進歩の度は加はり、文字の發見と共に茲に文書に依る歴史時代が始まるのであり (Ibid., p. 43-67)。第四及び第五期は希臘及び羅馬時代であり (Ibid., p. 67-86)。第六及び第七期は中世期であつて、其の中、第六期は十字軍に、第七期は印刷術の發明に終り (Ibid., p. 117- et p. 133)。第八期は印刷術の發明からデカルトに依る哲學的思索の發見に至り (Ibid., p. 146)。而して第九期は、デカルトから大革命に至るものと做して居ることは (Ibid., p. 180- et Ibid., Tome II, p. p. 3-57)。縱令此の區分法が適切でないにしても、社會發達を階段的に觀た點に於いて、頗る價值あるものと云はねばなら

ぬ。社會發達の區分は正に歴史哲學の研究對象たるべきところであるからである。而してコントが其の「實證哲學」(Cours de Philosophie Positive, 6 vol., 1830-1842)の中に説ける歴史哲學殊に彼の有名なる三階段説(第一、神學的——想像の階段——軍國的好戰的階段、第二、形而上學的——抽象の階段——社會革命時代、第三、實證的——實在の階段——産業的平和的階段 (Comte, Op. cit., Tome 4 et 5。))は又實に其の多くをコンドルセエの所説に負へるものである。

右の如く、第十八世紀の佛蘭西哲學者は全く形而上學を避け、常に彼等の普遍的結論を事實に立脚せしめ、而してフリントが鮮に指摘せるが如く、彼等の哲學を以て政治よりも重要なりとし、政治は哲學に依つて方向づけられるものと解した (Robert Flint, La philosophie de l'histoire, 1878, Part 1, p. 347. 参照)。即ち、事實に立脚せる哲學に依つて、革命ではないにせよ、少く共深刻なる改革を誘致し得ると做すのが彼等の根本的態度であつたのである。

之に對し、獨逸の思想家は、疑も無く、彼等の祖國が一國として存することなく、多數の相異なる國家に分割せられて居つたことのために、少く共一八一五年頃迄は何等政治的見解を持たなかつた。彼等の歴史哲學は夙に形而上學的色彩を帯びて居つた。其の代表的なるものとして、吾々は著者セエと共に、カントの名を挙げねばならぬ。彼は一七八四年に柏林月刊雜誌に「世界公民的見地に於ける一般歴史考」(Idee zu einer allgemeiner Geschichte in weltbürgerlicher absicht. 木村素衛譯、カント著作集、第十三卷、本文第一頁—第三三頁所載)を發表して居るが、此の中に於いて、其の推論の根據をば少しも歴史的事實に置いて居らぬ、蓋し歴史的過程は就中「先天的に」(a priori)決定せられると考へるからである。即ち、經驗的具體的歴史の研究は歴史哲學に必要ではある、併し歴史

哲學の究極目的は歴史の普遍的概念を樹立するに在る。然も之が爲には經驗的認識よりも先天的認識が重要であると云ふのが彼の歴史哲學の根底をなすものである (Kritik der reinen Vernunft, 2. Aufl. 1787. Berlin, 1911. (Kant's gesammelte Schriften. Bd. 3. s. s. 27-30.) 天野貞祐譯、改譯、純粹理性批判、上卷、カント著作集、第一卷、第六五頁——第七三頁參照)。而してカント哲學に依據し、之を發展せしめたるフイヒテも亦純然たる形而上學の領域を固守し、其の歴史哲學に關する著「現代の特徵」(Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters, 1806.) に於いて、具體的歴史事實には一顧をも與ふる事なく、先天的に歴史哲學を樹立し得ることを力説して居る、吾々が眞理を造るのではなく、眞理が獨自の力に依つて自らを造るのであると云ふのが彼の主張である。而して又、ヘゲルが純平たる先天的方法に従ひ、然も佛蘭西のヴィクトル・クウザン (Victor Cousin 1792-1867.) の如き、著くヘゲルの影響を受け、殆ど全く第十八世紀の佛蘭西哲學の傳統を打棄てたるのみならず (Flint, Op. cit., Part 1. p. p. 171-226. 參照)、ヘゲルの歿後、柏林大學に在つて學べる夫のカアル・マルクスも亦最初著くヘゲルに影響せられたるを想へば、當時思想界の空は、既に没した此の太陽の餘光に輝いて居たのである。茲に於いてか、著者セエが、形而上學的歴史概念の代表論者としてヘゲルを、實證的概念の其れとしてコントを、而して批判的概念の其れとしてクウルノオを挙げ、第一篇の第二、三及び四の各章を夫々に與へて、之を詳論して居るのは頗る當を得たものと云はねばならぬ。

唯聊か不當を感じしむるのは、著者がヘゲルを論するに當つて、勿論、其のマルクスとの思想的關聯及び異同を隨所に指摘しては居るが、此のヘゲルの反位に立つに至つたマルクス及びマルクシズムに關する詳論をば缺いて居ることである。併し乍ら、此の事は、著者をして云はしむれば、著者の別著「唯物史觀と歴史の經濟的説明」

を參讀せよと云ふかも知れない。而して、此の別著に於ける著者のマルクシズム殊にマルクス・エンゲルスの唯物史觀批判と、敘上の獨佛傳統の歴史哲學批判とを前提とし、其の上に展開せんと試みたるものこそ即ち著者自身の歴史哲學に外ならない。然らば其れは如何なるものであるか。

三

著者に據れば、先づ、ヘゲル學說に其の最も明瞭なる表現をば見る所の形而上學的概念は、何等現實に觸れる事なき極めて茫漠たるものである。次に、コントに依つて代表せらるゝ歴史の實證的概念は確にヨリ豊富ではある。だが其れは餘りに排他的に社會學的概念と混合して居る。其れは、自然科學と社會科學とを極度に同一視し、先づ以て法則の樹立に専念し、一般より個別へと進むことに依つて、即ち歴史的智識の要求するのと反對の進み方をするに依つて、偶然的事實及び個人の役割を低く評價し、而して凡ゆる偶然性を輕視することに依つて、現實に關する一方的の、即ち頗る不完全なる概念をば與ふるに過ぎないものである。最後に、クウルノオに見るが如き、歴史の批判的概念は、歴史的事實の中に於いて、永久的のものと偶然的のものとを識別し、然も史實をば狹隘なる法則に閉ぢ込めんとするよりも寧ろ之を説明せんと努めて居るの點、頗る優れて居る。即ち其れは歴史哲學を具體的歴史に結び付けしむるものである。唯、クウルノオに缺けて居る一點は、歴史科學の正確なる概念を得ることであり、而して此の點に於ける彼の研究の不足を補へる者にラコンブ (Paul Lacombe, L'histoire considérée comme science, Paris, 1894.) あり又セイニヨウボオ等 (Charles Seignobos et Ch.-V. Langlois, Introduction aux études historiques, Paris, 1898.) があるのであるが、著者セエも亦先づ此の點から問題を提起して居るのである。即ち、先づ、著者は、第一篇第五章に於いて、歴史科學に關する正確なる説明をば與へんとするのである。抑々、

歴史は眞に「箇」科學であるか、若くは如何なる程度に於いて然るか。此の久しき前から論議せられて居る問題の解決に對して、前掲ラコンブ及びセイニヨウボオ等の外に尚デシリイ・ペレル (Henri Berr, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique*, Paris, 1921.) 及びエミール・メイエルソン (Emile Meyerson, *De l'explication dans les sciences*, Paris, 1921.) 等の寄與せる所は誠に多とすべきであるが、然も今日之に對する確乎たる解答は見出されて居らぬ。著者は、然らば、此の問題を如何に解するか。著者に從へば、歴史は數學若くは物理・化學等の如く、法則 (Lois) 即ち諸事實間に於ける數理的關係を樹立し得ざるものである。然も、物理・化學等に在つて法則の確立を助ぐ可き實驗 (Experimentation) は、勿論、歴史研究に於いては禁ぜられる。加之、歴史研究に在つては直接的觀察は爲し得ない。過去の事實は全く間接に、即ち資料に依つて知り得るのみであるが、然も此の資料たるや概して是等の事實の真相に就いて極めて不完全なる觀念をば與ふるに過ぎぬ場合が頗る多い。否、資料の保存は多く偶然の結果たるに過ぎず、從つて之に依つて原始時代に關する諸事實をば知悉するが如きことは殆ど不可能と云はねばならぬ。斯くて、資料の探求、批判、解釋等に絶大の苦心が拂はねばならぬこと、全く著者の言ふが如くである。而して資料の傳ふる所は又、箇々の事實に關する智識に過ぎぬ。然るに、「普遍性」(Général) を除いて科學は存しない。法則は常に普遍的に適用せられねばならぬものである。茲に著者は先づ歴史の科學性の制限を求むるのである。

更に、著者は、歴史的經過に及びず個人の影響の輕視すべからざることを例示する。然らば、歴史上に於ける個人の役割は決定的のものであり、延いて歴史研究は著く非科學的な單なる個人的傳記の綜合物に過ぎぬものであるかと云へば、著者は、同時に、個人が其の時代の產物であり、彼の思想的發展が彼の生れ且つ生活せる社會的環境

に依つて制約せられることを認めるのである。だが、此の事は、今日、史家の間に在つては、寧ろ常識である。所で常識は必ずしも科學的眞理を意味しない。即ち、人間が社會的環境の產物であると同時に、其の社會的環境は又人間の意見に依つて支配せられると云ふ、此の二つの現象間の相互關係若くは交互作用を認めたのみでは、問題は徒らに循環する許りであつて、決して根本的に解決せられるものではない。問題は其の何れが本源的であり、何れが派生的であるかを決定するに在る。而して之が解決は、勢ひ、唯物論と觀念論との對立抗爭に結果すべきであるが、著者は此の問題に深入りするを避け、唯、個人の役割を如何なる程度に評價すべきかを決定することの難事たるを説いて問題を打切つて居る。

此の歴史過程に於ける個人の影響評價の問題は又當に歴史的事實の偶然性必然性の問題と密接なる關係をば有する。而して、人間と其の社會的環境との相互關係に就いて極めて常識的な折衷説をば持する著者は、今や當に、歴史的事件の偶然性必然性の問題に就いても亦頗る懷疑的たらざるを得ない。著者は佛蘭西大革命を例に採り、一應之が生起の必然性を承認せる後、種々の疑問を提起する。即ち、其處には偶然が何等かの役割をば演じなかつたか。全く別の方向に導く可き別箇の事件が生じ得なかつたか。又別個の政治家が革命の危機を救済し得なかつたか。而して社會的變化が漸進的に生じ得なかつたであらうか。要之、アンシャン・レヂウムの全歴史は大革命に歸著するを思はせるが、然も此の舊制度の積弊を一掃するために、積み重ねられたる激烈なる火藥を爆發せしむべき口火は必然的に切られたるものであるか否か、之を決定することは不可能だと云ふのである。

敘上の歴史上に於ける個人の役割及び事件の必然性に關する著者の所見は充分に讀者を首肯せしむるものではない。否、其れは一步間違へば、歴史を以て單に個人に依つて惹起せられたる事件の羅列であつて、歴史が何故に今

迄の如き經過を辿り、決して其れ以外のものではなかつたかの原因をば、神、英雄、軍人、政治家、支配者等の個人的性質に在りと做し、又歴史を以て偶然的出來事の羅列と看做して、歴史的事實が、成る原因に依つて起こり、然も其れが不斷に流動變化し、其の流動變化には、之を貫く一定の歴史的原則の存することを認識し得ぬ所の、所謂舊き觀念的歴史觀に墮する危険がある。だが其れは兎に角として、著者に據れば、個人の役割並びに箇々の事實を考慮せねばならぬことに依つて、歴史研究は愈々複雑なるものとなり、歴史的法則の樹立は益々困難となる。遂に、然らば、歴史は科學たり得ざるものであらうか。

茲で、著者は、科學を以て單に法則即ち數理的關係の探求及び樹立にのみ存するものとせず、同時に就中現實の説明に在りと做す所のメイエルソンの所説(E. Meyerson, De l'explication dans les sciences, 1921, t. 1, p. 33-)を強調し、歴史に於いても、縱令法則の樹立は不可能であるとしても、然も之が爲に歴史は全く科學たり得ざるものではなく、諸種の事實並びに其の變化推轉の説明探求に依つて、歴史は完全ではないが、能く科學の名に値するものと看るのである。著者に依れば、實に、數學に依存すること多き物理學の如き科學に於いてさへ、尙吾人は當該現象を具體的に把握せんと試みる。吾人は人間頭腦の案出せる、最も簡潔平易化された、公式に満足し得るものでなく、實體的現實(Réalités ontologiques)をば探求する。然るに、現實は吾々の理性の法則に従つて居らぬ。説明し得ぬ幾多の事實がある。吾人は之に對し合理的説明を追求する。科學は實に不合理の部分の減少に努むるものである。茲に理論が構成され而して之に依つて現實を出來る限り正確且つ完全に説明せんと努むる。之が正に科學の名に値すると云ふのである。

然らば、種々の範疇に分たれ、從つて説明の探求に難易あるべき、歴史的事實を明確に説明するには如何にすべ

きか。茲に於いて、著者は、第六章に於いて、比較法(Méthode comparative)の重要性を力説し、正に之こそが歴史的事實に充分なる説明を與へ、歴史をして眞に一箇の科學たらしむるものであると主張する。然らば謂ふ所の比較法とは如何なるものであるか。其れは同時に空間と時間とに就いて行はれる。即ち、其の一は一定の時代に於ける諸國の社會・經濟・政治的狀態の比較であり、他は同一國に於ける諸時代の諸制度の比較である。だが、著者の比較法は、ボアソナード(Boissonnade, Le travail dans l'Europe chrétienne au moyen âge, 1921-)の如く、歐羅巴諸國の經濟的現象の比較と云はんよりは寧ろ之が單なる羅列に過ぎざるものを謂ふのではない。事實の單なる羅列は、諸國に於ける發展をば餘りに同一視させ、特殊性を著く輕減する。此の「説明的」(Explicatif)たらずして、單に「記述的」(Descriptif)たるに過ぎぬ方法は、著者セエの探る所ではない。著者の比較法は、一方、各國の特殊性を明瞭にし、其の國の社會・經濟・政治的狀態に關する明確なる認識を得ると同時に、他方、一國の變化推轉若くは發展進化を正確に説明し得るものでなければならぬ。即ち、著者に據れば、例へば、中世歐羅巴諸國に於ける土地所有形態の異同、所謂資本の原始蓄積過程に於ける諸國の相違、諸國に於ける産業革命の到來の遲速等を明確ならしむることに依つて、諸國資本主義の成立發展過程に於ける差違が明示せられ、又他方近代資本主義は之を古代羅馬時代の「資本主義」と比較する時、一層能く理解し得ると做し、此の點に就き、サルヴィオリイの勞作「古代社會に於ける資本主義」(Salvioli, Le capitalisme dans le monde antique, trad. Bouret, 1906-)に於ける比較論説を引用し、之を推賞して居るのである。斯くして、歴史及び其の一部門たる經濟史は、史的發展の法則確立の困難の故に、自然科學と同一資格に於ける科學ではあり得ないとしても、然も敘上の比較法に依つて、史的發展に於いて、特殊的・偶然的出來事の結果たるものと、逆に永久的・普遍的現象の結果たるものとを識別し、

其の間に發展の傾向を知悉し得、以て單に「敘述的」ならずして能く「說明的」たり得るのであり、而して結局著者は歴史を以て「説明科學」(Science explicative)と規定せんとするのである。

次に、然らば、或る時代に於ける諸國の社會經濟狀態の差違は何故に又如何にして生ずるか。同時に、一國に於ける發展は如何にして行はれるか。吾々は單に或る時代の各國の政治經濟狀態の異同若くは相異なる二つの時代の制度の相違を説明するのみでなく、其の由て來たる所をば明確ならしめねばならぬ。殊に、歴史が單に過去に於ける人類社會の靜態的狀態の研究でなく、時代の經過と共に行はれる變化推轉の研究を主とする以上、人類社會の發展原因を究めることは史的研究の重要任務と云はねばならぬ。茲に於いてか、著者も第七章に於いて「發展の概念」を取扱つて居るが、其の説く所は頗る常識的である。即ち、著者は、久きに亘つて不動的狀態を持せる國、若くは其の發展の或る段階に於いて凝結的狀態を保てる國として、古代埃及、支那及び印度を挙げ、發展の明示され得ない是等三國に於いては、農業經濟が全く支配的であり、家族制度が頗る鞏固に確保せられて居り、而して自足經濟を保つて外界との接觸少く、縱令接觸するとしても、其れはヨリ活動的乃至好戰的國民に依る侵略乃至征服に依つて強制せられたる受動的のものたるに過ぎず、海上制覇に依る海外進出の如き夢想だになし得ざるを述べて、茲に其の非發展性の原因を求め、之に對し、夫の古代希臘文明を以て、逆に、新商業關係の締結・新植民地の建設を求めて不斷に地中海々上を縱横に航行せる、世界の新奇を求めて已まぬ冒險的(Speculative)海國民の所産と做して居る。而して近代歐羅巴に就いても亦、著者は、新奇と變化とに對して進取的・熱情的なる西歐羅巴と、農業的自足的經濟を營み、文化的發展の遅々たる大陸的・半睡的なる露西亞とを對比し、文化を促進し、社會經濟組織の急速なる發展を遂げたのは、皆是、海上權力者乃至大商業國民であると云ふ。誠に、夫の十字軍の遠征、殊に

地理上の諸發見・征服等こそは、ルネッサンスを生み、又商業資本の巨大なる蓄積及び之に伴ふ經濟的諸變化を誘致せる主因であると説く。斯くて、著者は、人類社會の發展を以て一直線を成して進むものではなく、諸種の潮流と接觸する時にこそ促進せられると看るベルグソンの説を引用して全く之に賛同する。即ち、社會經濟的發展は、著者を以て觀れば、本質的には、武力的乃至平和的なる即ち侵略乃至商業取引に依る對外的接觸に依つて惹起せられるものである。従つて、一國家乃至一國民の發展は、外的關係を切斷して單に其れのみを孤立的に考へる時には、之を明確ならしめ得ないと論斷するのである。

併し乍ら、一國の社會經濟的發展を正確に理解するために、其の對内的及び對外的即ち全體的觀察を必要とすることは自明の理である。問題は社會發展の究極原因を何に求めるかに在る。敘上の如く、著者は、此の點に就いて、對外關係を頗る高く評價するが、然らば、其れは何故に生ずるか、又其れは一國の發展に對し如何なる程度の影響を及ぼし得るものであるか。著者に做つて、夫の地理的諸發見と近代資本主義との關係を採つて觀るならば、抑々新大陸發見は何故行はれたか、又其れに依つて始めて西歐諸國に資本主義の發生を見たのであるか否か、是等の點が明らかにせられねばなるまい。所で、吾々は、新大陸發見の行はれた所以を、全然、單に新奇と變化とを求むる冒險的精神に求め得るか、又發見に依つて始めて西歐諸國に資本主義が發生したと做し得やうか。斯かる重大なる經濟的結果をば惟り新大陸發見のみに、而して之が發見をば單なる冒險心に歸する事は、其の立論たるや餘りにも冒險的ではなからうか。吾々は斯かる皮相的俗説を清算せねばならぬ。成程、夫の地理上の諸發見と共に起つて商人資本の發達を急速に促進せしめた商業上の諸大革命が、十六七世紀に於いて、封建的生産方法から資本制生産方法への推轉を促す一の主要な要素たりしことは、何等の疑ひを容れない。世界市場の突如たる擴大、流通諸商品の倍

加的増大、亞細亞の諸生産物並びに亞米利加の資源を制握せんとする歐羅巴諸國民間の競争熱、植民制度等——誠に、是等のものは、生産の封建的制度を破砕する上に本質的の貢獻をなした。だが、近世的生産方法は、其の第一期間たるマニファクチュア時代に於いて、中世紀の間に其の條件が既に造り出されてあつた處にのみ發達したのである。地理的諸發見の如きも、不斷に擴大される規模で生産せんとする、資本制生産方法の内在的必然的欲求の所産に外ならぬ。即ち、西歐諸國民が如何に冒險的・劃期的行爲を敢行して新航路乃至新大陸發見を遂行し、以て、舊生産方法の滅亡と資本制生産方法の隆興との上に一の壓倒的な影響を及ぼしたとしても、彼等は生産力の發展に依る世界市場の擴大と云ふ必然的欲求の糸の引く儘に踊らされた、所詮は、單なるマリオネットに過ぎなかつたのである。新奇と變化とを求むる冒險心の如きは、地理的諸發見を促す一つの契機ではあつたらうが、其の本質的原因では斷じてない。蓋し生産力の發展は總て何れの日にか市場擴大の爲の地理的諸發見を必然たらしめた筈であるからである。誠に、社會發展の究極動因は生産力の發展に求めらるべきであり、一切の歴史的變轉過程は生産力の發展と之を蔽ふ生産關係との矛盾・衝突から把握せらるべきである。斯く解する時、一切の歴史的變轉過程は實に必然であり、偶然的契機の存立は許されない。縱令一見偶然性的に見ゆる、個人の行爲なり、個々の事件なりが、史的發展に重大影響を與へたにせよ、其の結果を強調し、恰も之が社會發展の究極原因たるが如く説くに忙ぐして、其れが如何に其の時代の必然的欲求の所産たりしかを看過するは、決して史的發展に關する正確なる理解を得る所以ではない。然るに、著者が、歴史研究の主要對象として普遍的・永久的事實即ち所謂「制度」(Institutions)なるものを重要視する必要をば力説し乍ら、他方其れが偶然的出來事及び個人殊に偉人の行爲に依つて影響され、之が爲に歴史の直線的發展が阻害せられ、其の歪曲變化が行はれ、發展法則樹立の難事たるに至るを縷述して、斯

かる個人の役割なり、個々の事件なりを究極に於いて制約するものが何であるかを明らかにせず、從つて彼等を必然的發展過程に於いて觀ることなく、たゞ繼起する歴史的諸現象の合理的説明探求、之に依る發展傾向の把握、之が爲の比較法の必要を縷々として唱道するに終始して居るのは、聊か讀者に慊らぬ感をば抱かしむるものではなからうか。

四

以上吾々は「歴史科學」に關する著者の見解を論述した。著者に據れば、歴史は、法則即ち諸事實間に於ける數學的關係の樹立不能に依つて、自然科學と同一資格に於ける科學性を要求し得るものではないが、然も諸事實及び其の變化推轉の合理的説明追求に依つて、能く科學の名に値し得る。即ち所謂「説明科學」として確乎たる地歩を占め得るのである。然らば歴史は一箇の哲學に迄達し得るか。此の問題を著者は第二篇最後の第八章に於いて取扱つて居るが、敘上の「歴史科學」に關する著者の見解は茲で必然に其の「歴史哲學」に關する見解をば制約して居るのである。

著者に從へば、此の「歴史科學」の次ぎに論ぜらるべき「歴史哲學」確立の問題は誠に難問であり、之が解決は具體的に現れる種々なる場合をば綜合研究するに非ざれば期し難く、單に先驗的に具體的歴史現象の上に超然たる形而上學を樹立するが如きは避けねばならぬことである。斯くて、著者は、アンリ・セエが其の「歴史に於ける綜合」(Henri Berr, La Synthèse en histoire 1911, p. 258)に於いて、「歴史的綜合即ち歴史哲學は、史實の助けを俟つて研究せねばならぬが、同時に諸種の原因の役割を理論的に、抽象的に究明せねばならぬ」と云へるに對し、更に重ねて此の抽象が飽く迄も具體的現實との接觸をば失すべからざるを附言する。而して著しく抽象的・演繹的

なる方法に依據す可き歴史哲學を以て、斯くの如く、飽く迄も具體的史實確認の基礎の上に築かるべきを主張するのは、具體的歴史現象の合理的説明探求に歴史科學確立の根據を求め、然も歴史哲學を以て此の歴史科學の延長と看する著者としては必然の歸結であると云へやう。固より、斯かる歴史哲學に對して、深奥を缺き、卑俗平凡であるとの批難が加へられるであらう。著者も其れを認める。だが、著者をして云はしむれば、斯くてこそ始めて、理論に理論を重ねて得る所なき徒勞を避け、一方歴史哲學をして歴史科學の提供し得る具體的事實の基礎の上に確立せしめ、他方史的勞作に哲學的思想乃至色彩を強く浸透せしめて、從來屢々截然と分離して居つた歴史科學と歴史哲學との關係をば密接ならしめ得る、即ち眞に「批判的・科學的なる」歴史哲學を確立し得るのである。著者を以て觀れば、從來歴史科學と歴史哲學とが分離せられて居つたことは誠に憾む可きであり、而して其の一因は今迄歴史哲學が歴史家よりも寧ろ哲學者に依つて研究せられて居つたことに存する。著者は茲に史家が將に果す可き重要且つ興味ある課題ありと做すのである。即ち、史家の努力は具體的史實の研究をして哲學的ならしむると同時に、歴史哲學確立への凡ゆる努力をば具體的史實の上に基かしめ、斯くて歴史科學と歴史哲學との互助に依つて兩者の關係を愈々密接ならしむることに向けられねばならぬと云ふのが著者の基本的主張である。而して此の科學と哲學との近接、其れは實證主義と共に、實にコントの採る所である。斯くて、著者が、「哲學的となれる科學と科學的となれる哲學との合一」(Comte, Op. cit., t. VI, p. 487.)の必要を力説せるコントの所言を含蓄ある言葉として賞揚し、此の合一の爲に實證的研究の必要を強調して居るのは、コント哲學の傳統が著者の中に新なる意義に於いて甦れるを示すと共に、著者の場合にも亦謂はゞ佛蘭西哲學の傳統たる實證主義的傾向が實に根強く支配せるを感ぜしむるものである。

最後に、著者は、眞に批判的・科學的なる歴史哲學の確立條件として、全く不偏不黨の立場を持せねばならぬことを力説する。即ち、嘗て愛國的・黨派的たるべからざるのみならず、又「先驗的に」組織立てられたる或る種の概念に依つて嚮導されてもならない。凡ては資料から——其の公平なる觀察・選擇から——發足せねばならぬと云ふのである。此の意味に於いて、著者は、ヘゲル學說を、コント實證哲學を、而して更にはマルクスの史的唯物論をも排撃するのである。然も、著者に據れば、斯く眞に不羈獨立の立場を持すればこそ、其の現實の「政治技術」に寄與する所も亦頗る甚大となると論結するのである。

此の著者の所言は一應吾々を首肯せしむるが如くである。だが、更に一步を進めて此の言葉の持つ意味を究めて觀れば、其處には多大の疑問が湧かざるを得ない。資料の公平なる觀察乃至選擇とか、若くは不偏不黨の立場の保持とかは、一體如何なることを意味するであらうか。事實の觀察乃至選擇が、究極に於いて、何等かの史觀なしには爲し得られぬことが自明の理である以上、其處には何等かの史觀が先づ確立せられて居らねばならぬこと云ふ迄も無い。即ち、謂ふ所の不偏不黨の立場の保持とは、究極に於いて、諸事實の選擇なり觀察なりが、其の史家の主觀の色に依つて強く塗りつぶされることを意味するものではなからうか。果して然らば、其處に描き出されるものは極めて歪曲せられたる歴史過程であると云はねばなるまい。換言すれば、不偏不黨こそ却つて甚しく黨派的なる意義をば有するものではなからうか。筆者の疑問とするところである。

五

以上筆者は科學と歴史哲學とに關する著者の所見を略ぼ紹介し得た積りである。勿論、著者の見解に對して、筆者は全く満足するものではない。既に隨所に指摘せるが如く、不満もあれば、更に異見もある。併し乍ら、彙には、

時代別の、地方別の、若くは産業別の良書多きに比して、概論的著述の少く、此の點に於いて寂寥をば感ぜしめたる佛蘭西經濟史研究學徒に「佛蘭西社會經濟史概論」(Esquisse d'une histoire économique et sociale de la France, depuis les origines jusqu'à la guerre mondiale, Paris, Alcan, 1929. 「社會經濟史學」(第二卷第二號、昭和七年五月號)に筆者の紹介文あり。就いて參讀を賜はらば幸甚。)を提供して裨益する所少からざりし著者が、今や七十有餘の高齡を以て、然も尙ほ且つ孜々として研鑽を重ね、哲學的述作に乏しき佛蘭西經濟史學界に復た、本書を提げて見えたる、其の學問的熱情の熾烈なるに對しては、私かに敬慕の念切なるものあるを禁じ得ざるもの豈筆者一人のみではなからう。——一九三五・六・四——

吉川秀造著「士族授産の研究」

小林 榮 二郎

周知の如く、徳川封建身分制度の廢止、版籍奉還・廢藩置縣に伴ふ祿制の改革・整理・廢止及び廢刀令・兵制改革等々之等一聯の維新政府の諸制度の變革は、就中、主として封建家臣團よりなる士族階級の生活を根柢より脅かしたのである。次いで生ぜざる之等の大多數士族の文字通りの遊民化、且つ、窮乏化は、明治政府及び諸藩縣をして、士族救済を目的とするところの、秩祿公債の發行・金祿公債證書の交付、續いて、士族の歸農工商に係る幾多の厚き特別の施設、一言にして云へば、士族授産の諸政策を實行せしめるに至つた。士族授産は正しく明治政府及び諸藩縣の社會政策であり、經濟政策でもあり、政治政策でもあつた。而して、かくの如き士族授産は、之を維新變革の全過程、即ち、日本資本主義の成立過程からみれば、封建家臣團の階級編成替に關聯する一つの產物であり、逆に又、それは軍閥的官僚的明治政府の指導による資本主義成立過程の一つの現象形態でもある。従つて、士族授産それ自體は維新變革の全過程に於ける一部分に過ぎない。乍然、このことは士族授産が維新史上有するところの意義を輕からしめるものではなく、寧ろ、實際的には、士族の窮乏化の救済策は、明治政府それ自身の政治的性質からみて、極めて重大なる社會問題であつた。

本書は、著者が「明治政府の士族授産」(本庄榮治郎編「明治維新經濟史研究」所收、昭和五年)を發表せられ